私の好きなこと（敬愛大学教育こども学科1年生）

Ａ

私は、「欅坂４６」という女性アイドルグループが大好きです。私が中学3年生の時にデビューして、それ以来ずっとはまっています。

きっかけは、ある音楽番組に出演していてデビュー曲を披露していました。デビュー曲は「サイレントマジョリティー」という曲で、現代に生きる私たちに向けたメッセージが歌詞になっています。私はこの歌を聞いた瞬間に、なんてすごい歌なのだろう。と思いました。アイドルなのに一切歌っている時は笑わず、みんな目力もすごくとても圧倒されました。すべて大人の言う通りに生きるのではなく、自分の好きなように生きること。孤独になることを恐れてはいけないという歌詞がとても印象に残っています。私は、心の中で思っていることを表したり、言ったりすることが苦手なので、この歌を聴いて、言いたいことは言わなければ伝わらない。言わなければ何もできないと思いました。また、こんな風に自分も強く生きていかなければいけないと感じました。そして、その当時高校受験を控えていた私にとってはとても印象深い歌でした。

　それから私はこの欅坂４６の大ファンになりました。この曲以外にもメッセージ性の強い曲が多く、どれも印象に残るような歌ばかりです。また、ダンスもとても魅力的で、どれもとてもハードで難しく、インパクトのあるダンスになっています。ファンクラブにも加入し、ライブにも友達と何度か参加しています。毎回ライブの演出もすごく、とても圧倒されます。しかし、一年以上新曲を出していないので次に新曲がでるのがとても待ち遠しいです。

　同世代とは思えない彼女たちは私にとって憧れでもあります。それほど素晴らしいグループでとてもいい歌ばかりなのでぜひ先生も機会があれば聞いてみてください。

Ｂ

私はTWICEが大好きだ。まずは、TWICEとは何かについて説明したい。TWICEとは韓国の女性アイドルグループである。人数は全員で９人だが、韓国のアイドルと言っても９人のうち３人は日本人メンバーであるため、日本人にも親しみやすいグループである。彼女たちは高い競争率のオーディションに合格したため、１人１人のダンススキルや歌唱力が高いことで知られていて、韓国のアイドルグループの中でも世界的に有名なアイドルグループの１つだ。

　次に、TWICEを知った経緯についてだ。私は元々韓国が好きではなかった。なぜなら、よく耳にするニュースで良い印象を受けなかったからだ。また、アイドルグループというのも誰が誰か分からないうえに、中学校の頃まではアイドル自体を毛嫌いしていた。しかし、高校生になった際に親友に勧められ彼女たちの動画を見ていくうちに、TWICEの魅力を知り、気づいたときには大好きになっていた。2017年６月28日にTWICEが日本デビューを果たしたのだが、その日が私の誕生日であったため、親近感がわいたというのも彼女たちを好きになった理由の１つだ。

　最後はTWICEの魅力についてだ。彼女たちはここには表しきれないほどの魅力を持っているが、ここでは２つに絞って説明していきたい。１つ目は、TWICEとは努力の結晶であることだ。私は彼女たちのすべてを知っているわけではないが、TWICEの動画などを見ていると努力が伝わってくる。例えば、TWICEのメンバーの１人であるモモについてだ。彼女はオーディションの際にほとんど寝ずに練習に励み、他のメンバーやスタッフからもオーディションを受ける人の中で最も努力家だと言われていた。努力が認められデビューメンバーに選ばれた彼女の合格発表は、涙なしでは見ることができない。２つ目の魅力は素敵な人柄だ。ここではメンバーの１人であるチェヨンついて説明したい。あるテレビ番組でTWICEに相談するというコーナーがあった。相談をしに来た人の中に人間関係で悩んでいるという人がいた。その人に対して彼女は「新しい人達に出会った時に、ありのままで接していれば良い人に出会うことができるから、自分のことを嫌う人たちの言うことなんて気にする必要はないんです」と言い、最後に頑張ってと声をかけた。私は人間関係で悩んだことはないが、この言葉を聞いたとき涙が出た。また、相手の立場に立って相談に乗っている彼女を見てとても素敵だとも思った。

　このような魅力から私はTWICEが好きだ。また、毛嫌いしていたものを好きになったことで自分自身の新たな一面に気づき、趣味の幅を広げることもできた。これからも、様々な分野に挑戦していきたい。

Ｃ

私の好きなものは、バリトンサックスだ。高校一年生の時に出会い、３年間という短い間で私はバリトンサックスの沼にはまってしまった。

　出会いは高校１年生の秋ごろ。私は夏に柔道部を辞め、３か月ほど何となく過ごしていた。そこで友人に吹奏楽部に入らないかと誘われた。今改めて考えてみても、どこから途中から吹奏楽部にはいる勇気が出たのかはわからない。そして、当時かけているという理由から、バリトンサックスを担当することになった。

　バリトンサックスとは、吹奏楽で使用するサックスの中で最も大きく音域が低いもので、重さは約8kgある。チューバやバスクラリネットと共に低音パートを担当する。他の低音楽器が地面に重心を置いて演奏する中、バリトンサックスは首に下げて演奏するので体への負担は大きいほうだ。また、大変な思いをする一方でメロディラインを任されることは極めて少ない。そして、楽器が大きいためその分値段も高く、出費が激しい女子大生には到底手の届かない額であり、今も欲しいという気持ちだけが私の中にある。

　このように、一見楽そうに見える楽器だが、そうはいかない。私は少しでも早く周りに追いつこうと毎日必死に練習した。学年で上の下くらいの成績であったのが下の上になってしまうくらい、バリトンサックスにのめり込んでいた。気がつくと、ほかの楽器には出せないバリバリとしたかっこいい音色から繊細な音色まで出すことのできるバリトンサックスに、深く惚れ込んでいた。また、伴奏の大切さにも気がついた。どんなにメロディラインが上手でも、伴奏が乱れていれば曲は台無しになってしまう。まさに縁の下の力持ち、いや、もはや伴奏は縁の下ではなく、主旋律といってもよいのではないだろうか。とても主観的な話になってしまったが、伴奏が曲のカギになることには違いないだろう。このように私は楽器だけでなく伴奏の虜にもなってしまったのだ。

改めてバリトンサックスについて考えてみると、楽器だけではなく、当時の思い出なども含めて私の好きなことであると気がついた。しかし、私が低音楽器の沼にハマってしまったことは事実であり、これからも低音楽器と共に新たな思い出をたくさん作っていきたいと考えている。いつかバリトンサックスを購入できた時には、また自分の好きなものとして紹介したい。

Ｄ

私の好きな本は「東京マグニチュード8.0～悠貴と星の砂～」という本です。これはアニメのノベライズ本なのですが、アニメの話に作者の新たな話が付け加えられていて、読んでいてとても面白いです。

なぜ、私がこの本が好きなのかについて書きます。私は地震学などが好きです。地震は地球が生きている証拠、今でも発展をしようとしている証拠だと思っているからです。ただ、近年、首都直下地震が近いうちに起きると危惧されている。この本ではその地震に関してシミュレーションを行い、大地震が起きたときどのような被害が予想されるのか、どのように行動すればよいのかが正確に書かれている。また、この作品で地震が発生した時間が15：46と東日本大震災を意識しているかのように見えるが、この作品のモデルとなっているのは阪神淡路大震災(兵庫県南部地震)であり、さらに出版は2010年であり、なぜか46という数字が一致しているなど不思議な点もある。

そして、先ほども書きましたが、この作品は地震が起きた後の行動も示してくれています。例えば、主人公らはお台場で被災をします。主人公たちは最初の避難場所を芝公園にします。この芝公園には災害用の設備が整っているからです。マンホールを用いた簡易トイレやポンプなど、この作品を見るだけで芝公園にはこんな設備があって、災害時は個々で配給もやってくれるなどを描いています。私はこの作品を読んだ後、何度か芝公園を訪れました。作品に書かれていた通りポンプや地面に並べられたマンホールがあり、忠実に再現されているなと思いました。

私は災害について非常に興味があります。なので、その災害対応などが忠実に書かれているのが非常に好きなところなのだと思いました。そして私は教員になったら災害対策については力を入れて指導していきたいと考えるきっかけにもなった作品です。（762字）

私は三秋縋という作家の小説が好きです。初めて読んだ彼の小説は「三日間の幸福」という本で、中学校１年生の時にたまたま本屋で見つけたのがきっかけでした。帯に書かれた「寿命を買い取ってもらった。一年につき、一万円で。」という言葉が衝撃的で、とても興味を惹かれました。この本は人生を諦めてしまった主人公の青年が寿命を３か月だけ残して売り払ってしまうところから始まります。そこから主人公と監視員の少女との奇妙な共同生活が始まるのです。人生に絶望しきった彼らは共に過ごすうちにお互いのために生きることが自分の幸せなのだと気づきます。この本の好きなところは彼らにしか分からない幸せを描いているところです。例えば、彼らはバイクに乗って様々なところに行き、インスタントカメラで各地の自動販売機を撮り続ける旅をします。これのどこが楽しいのか彼ら以外の人には分かりません。しかし、彼らにとっては何よりも楽しく、幸せなことなのです。私は周囲の目や意見を気にしすぎてしまうことがあります。そのせいで自分が好きなものを好きと言えないことや自分がやりたいことをやりたいと言えないことがあります。そんな私にとって、他人に笑われても、頭がおかしいと言われても「これが僕らにとっての幸せなんだ」と堂々と言える彼らは憧れでした。また、彼らは子供の頃の気持ちや夢を捨てられない若者です。それは間抜けに見えるかもしれませんが、私はそんな彼らがとても純粋できれいだと感じました。しかし、現実では彼らのように生きることは難しいと思います。世間は若者に子供っぽい考えを捨てて早く大人になりなさいと言うからです。それが自立して生きていくために必要だということはよく分かります。だからこそ、私は彼らや彼らの生き方に惹かれるのだと思います。私にはできない生き方をしている彼らを素敵だと思うのです。三秋縋の作品はどの作品にも「自分だけの幸せ」と「大人になりきれない若者」が描かれています。私にはできない生き方をする登場人物たちに私は強く心が惹かれるのです。三秋縋の作品を楽しんで息抜きをしながら、私は三秋縋の作品の登場人物とは違う大人らしい大人になりたいと思います。

Ｅ

私の好きなことは今やっている小学校の学童のバイトです。このバイトは友人から紹介されて今年の2月末に始めました。このバイトを始めるまでは小学生と関わる機会はほとんどありませんでした。初めての出勤の時には小学生は私のことを受け入れてくれるのか、仲良くなれるのか、不安でいっぱいでした。しかしそんな心配をしていたのがばからしくなるほど学童の子どもたちは元気で優しい子ばかりでした。子どもたちと一緒に遊んで一番驚いたことは遊びに工夫をして自分たちでルールを決めてみんなで楽しんでいるということです。今の小学生はゲームばかりだろうという偏見があったので、折り紙をしたり、厚紙でタコを作ったり、虫取りをしたり、ドッジボールをさらに工夫してボールをフリスビーに変えたりして創造力が豊かだなと感心しました。また、私が知らなかったカードゲームやおはじきを使って遊ぶマンカラや陣取りのルールを詳しく教えてくれて優しさを感じます。コロナウイルスの影響で学校がなくなり、一日保育が増えた時期にはあり余った時間で退屈しているのではないかと思いましたが、次々に新しい遊びを考えてころころと表情を変える子どもたちにはたくさんのエネルギーをもらいました。なかなか時間が取れず、2ヶ月ぶりに学童に行ったときは覚えていてくれるか不安でしたが子どもたちが駆け寄ってきてくれたり2か月前に話したことを覚えていてくれたり、本当に良い子たちだと思いました。

今年度になり、新一年生は入学当初ひらがなに苦戦していたのに、今は「しゃ・しゅ・しょ」などの複雑な字を書けるようになった子や、数ヶ月で背が高くなっている子、もう小学生だからといってわがままを言わなくなった子を見ると、その子たちの成長に感動して将来どんな人になるのかとても楽しみになります。自分の思い通りにいかないと泣いてしまう子やすぐにけんかになってしまう子、特別支援学級の子など、大変だと感じる子はいますが、その子たちはそれぞれ人と違った感性を持っていたり自分の好きなことを突き通したり、感心する部分がたくさんあります。最近は一人一人の良いところを探すのが楽しくて毎日バイトをしたいくらい学童の子どもたちが好きです。学童のバイトをして将来教師になりたいという思いが余計に膨らみました。

Ｈ

私の好きなことはアルバイトでの時間だ。私は幼い頃から大好きだったスターバックスで働いている。私は高校時代部活動に専念していたため、アルバイトというものはやったことが無かった。いつかアルバイトをするなら絶対にスターバックスで働きたいと強く思っていた。そして卒業してすぐ面接へ行き、初めてのアルバイトを大好きなスターバックスでできることになった。私は祖母や母の影響で小さな頃から出かけたりするといつもスターバックスを利用してきた。どの店舗に行っても素敵なお出迎えをしてくれるバリスタさんばかりでいつも憧れていた。またいつもドリンクを作成しているのを眺める時間がとても好きだった。そんな憧れの場所で憧れの人達と今一緒に働くことができているということにとても感動している。スターバックスでのアルバイトはお金を稼ぐためというよりもやりがいとして感じている。今はまだバリスタのトレーニング中であるが、たくさんのバリスタさんと一緒に仕事をしていく中で、気遣いや心遣いの素晴らしさを改めて実感している。そのような素晴らしい人柄を持った人達が集まって仕事をしているからこそ、スターバックスという素敵な空間を作れているのだなと思った。そのような空間を作る一員として仕事ができていることにとても誇りを持っている。また、スターバックスでは人の良いところを褒め合うという習慣がある。自分自身が感じた良さをメッセージカードに書き、そのコーナーにみんなで貼っていく。私はそれぞれが褒め合ってできるそのコーナーが今1番好きな場所でもある。本当にスターバックスは美味しいだけではなく、その1杯に込める思いや店員の意識など、どの店舗にも負けないと思う。私がずっと憧れてきたような素敵なバリスタさんになれるように、そして、私のようにスターバックスに憧れる人が1人でもできるようなバリスタさんになれるように知識を身につけると共に人柄も磨いていきたい。スターバックスで学んだことは必ず小学校の教員として役立つことばかりだと思う。職種は違くとも人柄や気遣い、他者への思いやり、関わり方など本当に生かせることばかりである。私自身成長するためにもたくさん吸収していきたい。そして誇りをもち、心からスターバックスのバリスタとして楽しみつつ、お客様ひとりひとりに最高の1杯を届けていきたい。